夏休み

刹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏休み

【Ｎコード】
Ｎ３３９１Ｎ

【作者名】
刹音

【あらすじ】
夏休みが終わりを迎えようとしているころ、友達の悠希から怪談をやらないかと誘いの電話が来た。麻理は軽い気持ちで怪談をやりに学校へと向かった。

（前書き）

※誤字いっぱいですｗ　すでにどこに誤字があるのかわかんないくらいいっぱいです。見逃してください！

夏休みが始まって早数週間。夏休みが終わるまであと数日。
私、小倉麻理（おぐら まり）は今まさに絶体絶命の窮地に立たされていた。
正座している私の横には高く積みあがった手付かずの宿題があり、目の前には物凄い剣幕でこちらを睨んでいるお母さんがいる。
「ねぇ、これはどういうことなの？」
視線をはずすことなく、お母さんは私に質問してくる。‘これ’とは言うまでもなく積みあがった宿題のことだ。
「アンタねぇ、何も言わないで良いと思ってんの？」
・・・お母さんはいつも私のことを名前で呼ぶ。それをアンタと呼ぶということは相当怒っているのだとわかる。
これは何か言わないといけない。それは分かっていることだ。しかしながら、やる気が出ないという理由だけで宿題を放棄していた私に言えることなどあるはずもない。
だからと言って、適当な言い訳を言ってしまえばお母さんの怒りはもっと大きくなってしまうだろう。
今、私に出来る行動の選択肢は『黙る』しかないのだ。
「いつまで黙ってるの！」
お母さんの堪忍袋が切れると同時に鋭いような機械音が響いた。その音が電話の鳴る音だと私が気づくころには、お母さんは素早く受話器を取っていた。
「はい。もしもし小倉です」
さっきまで私に怒声を浴びせていたお母さんの姿は何処へやら。そこには笑顔で受話器に話しかけるお母さんの姿があった。
女というものは一瞬にしてこうも態度が変わるものなのだから本当にオソロシイ。
「あら岡田さん？」
どうやら私の窮地を救ってくれた電話の相手は岡田というらしい。

私にも今ハワイ旅行に行っている岡田悠希（おかだ ゆき）という友達がいる。夏休みに入ってから会っていないのだが、元気にしているだろうか？
「麻理、悠希ちゃんから電話よ」
どうやら本人だったらしい。
お母さんに受話器を押し付けられるようにして私は電話に出た。
『もしもし。麻理～？』
「うん。麻理だよー。悠希えらいよ！すごい助かった！！」
『は？』
「あ、いやいや。こっちの話」
後ろからこっちを睨んでいるだろうお母さんの視線が背中にぐさぐさと突き刺さって痛いため、私は電話の用件を聞くことにした。
「で、今日はどうしたの？電話なんかして。ハワイ旅行は？」
『んとね～、夏休み中ずーっと麻理の顔見れないのは寂しかったから、ハワイ旅行途中で帰ってきちゃった』
「もうすぐ始業式じゃん」
『でも、寂しかったの！ねね、今から会えない？』
「大丈夫」
『ありがとー！じゃぁ、学校前集合ね』
「学校？」
『うん。夏といえば怖い話。学校で怪談話でもやろうと思ってね』
「はーい。じゃぁ、今から行くね」
受話器を下ろし、振り向いた先にいたのは私をじろりと睨みつけるお母さんだった。
「どこに行くって？」
そうだ。私はこの人に怒られていたのだ。簡単に遊びに行かせてくれるわけがない。
しかし、悠希には行くと返事をしてしまった。何よりも、私も遊びに行きたい。行くには目の前の強敵・・・というか恐敵をどうにかしなければいけないのだが、どうしたものか・・・。
「麻理学校行くの？」

電話がかかってきたおかげか、少しは怒りがおさまってきたらしい。
「うん。悠希が学校にきてって」
「何しに？」
何をするって・・・怪談ですが。
悠希と怪談しに行きます！なんていってしまったら、夏休み中一歩も外に出させてもらえなくなるだろう。
なんとかこの話の流れにあった言い訳を考えなくては。
「えっと、学校で悠希と勉強しに行くの」
「勉強ねぇ」
あからさまに疑われたが、ここで引くわけには行かない。引くわけには行かないのだが言い争いになれば口下手な私が負けるのは目に見えている。かといって、さっきのように黙ってしまうのは話が進まず時間だけが過ぎてしまうだけだ。
ここで私が取れる一番の選択は・・・
「じゃ、時間無いから私行くね！」
そう。逃げることだ。
「麻理！！」
背中のほうからお母さんの声が聞こえた。しかし、私は止まらず玄関までダッシュした。
帰ってきたときのことを考えるとめちゃめちゃ怖いけど、私は今を楽しみたい。
「いってきま～す」
またお母さんの怒声が聞こえそうな気がしてすぐに玄関を閉めた。
そして早く悠希と遊ぼうと走って学校へ向かった。

＋＋＋

「あ、麻理～」
沖波中学校と書かれた学校の校門前に悠希の姿が見えた。こっちに向かって手を振っている。

私は走る速度を速め、悠希の隣まで行った。
「ごめんっ。来るの遅かったね・・・」
ひざに手を当てて呼吸を整えながら謝る私に。悠希は優しく言った。
「いいよいいよ。私もいきなり呼び出してごめんね」
「それは大丈夫！その代わり明日から私の宿題手伝ってくれれば」
「・・まだ終わってなかったの？」
「・・・えへへ」
「・・手付かずなの？」
「う・・うん」
「ＯＫ，手伝ったげるよ。今からでも良いけど？」
「今日は遊ぶのー！」
ぷくぅっと頬を膨らますと、悠希はフグみたいだと笑った。
レディーに対してフグとは何だと言い返しつつ私も笑った。
その場でしばらく談笑した後、太陽の熱さが我慢できなくなり、私たちは学校の中に入った。
昇降口が開いてるのか少し心配したが、昇降口に手をかけるといとも簡単に開いてしまった。管理人さんでもいるのかと、学校に来たことを知らせに行こうと管理人室に行くと誰もいない。
ついでにすぐ横の職員室も覗いてみたがこちらにもやはり誰もいない。
人がいないのに昇降口が開いてるなんて無用心な学校だと思ったが、これは都合が良かったかもしれない。もしも先生や管理人さんがいたら怪談をやるために来たことがばれれば怒られてしまうかもしれないからだ。
「どこの教室でやるの？」
「私たちのクラス♪」
楽しそうに先を歩いていく悠希の指示に従い私たちの使っている２－３のクラスに入った。自分たちの席に座り、一息ついたところで悠希から怪談話を始めた。
交互にいくつかの話をし終えたところで、私の耳に誰かの足音が聞

こえてきた。しかし、さっき見た様子ではこの学校に人はいないはずだった。
「ねぇ、足音聞こえない？」
「う、うん」
悠希は私に近づいて隣に座った。私は耳を済ませて足音を聞いた。一人分の足音じゃない。数人分の足音が聞こえた。しかも、この教室に近づいてきているようだった。
「ね・・ねぇ、麻理、なんか近づいてきてるよ！？」
悠希は私の手をギュッと握って心配そうに私の顔を見た。私もその手を握り返した。
ヒタヒタという数人の足音は私たちのいる教室の前で止まった。悠希が私の手を握る力を強めた。痛いほどに。それほど怖いのだろう。私もすごく怖かった。
足音が止まって数秒たったとき、何の前触れもなく教室のドアが開けられた。
「「きゃぁぁぁぁぁ」」
私と悠希は目をギュッとつぶって叫んだ。叫ぶのをやめた後も怖くて目を開けることが出来ず、じっとして動かずにいた。。
「・・・麻理？悠希？？なにしてんの？」
そんな私の耳に入ってきたのは聞き覚えのある呆れ声だった。
おそるおそる声のほうに目をやると、同じ２－３の仲間のバスケット部５人の友達が不思議そうな顔でこっちを見ていた。
「ゆ・・・由美華（ゆみか）たちかぁ」
怪談話をしていたとはいえ自分の友達にこれほどまでに怖がってしまうとは情けない。いや、向こうがお化けのように現れるのがいけないんだ。うん。
私が一人で納得している間に、悠希は由美華たちに怪談をしていたことを言った。それで私たちがおびえていた理由が分かったのだろう。一斉に私を見てうんうんと頷いている。
「て、ていうかさ、由美華たちはいつ来たのさ。なんでここにいる

のさぁ」
恥ずかしさを紛らわそうと無理に話を変えた。
「なんでって。私たち、いまバスケの合宿から帰ってきたところなんだよね。で、絵美（えみ）が今日いつに忘れ物してたって言うから教室に来たら中から気配するから誰だろうって思って」
「それで見てみたら麻理たちやから驚いたわ。今怪談してたんやろ？ウチもいれてっ」
私たちの返事も聞かずに絵美は廊下側の自分の席に座った。
「私も怖いの知ってる～」
「私も！」
結局、私と悠希、バスケット部の五人で怪談話をすることになった。やはり、人が多いと聞いたこともないような話が増えてわくわくした。
怪談話が一段と盛り上がってきたところで、教室のドアが勢いよく開いた。一斉に皆がこわばった顔でドアのほうを見た。
そこにいたのは、私たちと同年代くらいで黒い髪を左右でおさげに縛っている女の子だった。
「怖い話してるのね。私も入れて！」
突然来た子を入れようか一瞬迷ったが、特に断る理由もないということでそのこも怪談話に入れることにした。
「君はなんて名前なの？」
そのこが席に着いたとき、何気なく名前を聞いてみた。私には見覚えのない子だったからだ。
「私、浜田優子（はまだゆうこ）っていうの。２－６だよ～」
２－６にこんなこいたっけなぁ？
考えてみたが、２－６には行かないし、もともと人の顔をおぼえるのが苦手な私だ。ただ記憶にないだけだろうと深くは考えなかった。
「よろしくね。優子ちゃん」
「うんっ」
こうして合計八人になった教室は一人が話をするたびにキャーキャ

ーと大騒ぎになった。耳の奥に響いてくるような騒ぎだったが特に嫌だと思うことはなく、むしろ友達と一緒に騒げることが心地よくて楽しかった。
そんな楽しい時間もあっという間に過ぎていき、時間は五時になろうとしていた。
「そろそろ帰ろっかぁ。雲行きも怪しくなってきたし」
悠希が空を見ながら言った。空を見ると確かに黒い雲が空を覆っていた。
「あ、ちょっと待って。最後にとっておきの話を」
そう言ったのは由美華だった。最後にとっておきの話と言われては聞かないわけにはいかない。
皆は帰る準備を整えた後、由美華の近くに輪を作るようにして座り、由美華の話に耳を傾けた。
「昔、この学校で首を吊って自殺した女の子がいるって話は聞いたことあるでしょ。そのこが自殺した教室って生徒に教えると騒ぐからって教えられなかったらしいの。それで、この前先生たちがその教室について話してるの聞いちゃったんだ。その教室って言うのが・・・」
「ここよ!!!」
そう叫んだのは由美華ではなった。
私たちは声のしたほうを振り向いた。
振り向いた先にある光景を見て、口を開ける人は私たちの中にいなかった。確認したわけではないが皆の顔は恐怖で引きつっているに違いなかった。
私たちの目の前にあったのは首吊り死体だった。
しかも、首を吊っているのはさきほど仲間にいれ怪談話を楽しんだ浜田優子だったのだ。
「いやぁぁぁぁぁ」
誰かだ耳を劈(つんざ)くような悲鳴を上げた。その悲鳴に弾かれるように私たちはその教室から逃げ出し、一目散に昇降口へ走った。

走って走って昇降口につくと、私たちは糸の切れた操り人形のようにへにゃへにゃとその場に座り込んでしまった。
口を開く人はなく、その場は静寂に包まれていた。
「私たちのせいなのかなぁ」
その静寂は、今にも消え入りそうな悠希の声によってやぶられた。
悠希の言葉に何が私たちのせいなのかと問いかける人はいなかった。
一瞬の間をおいて、また悠希がポツリといった。
「怪談話をすると集まってくるって言うよね」
そういい終わったとたん、雷がなった。シトシトと雨も降ってきている。
「帰ろっか」
私がそういうと、皆は静かに頷きそれぞれ家に向かって歩いていった。私も悠希の手をとり、細かい雨の振る中を並んで歩いた。
私と悠希の家は近所というわけじゃないがそれほど遠くない場所にあり、学校からの帰り道はいつも悠希の家の前を通って帰った。今日もそれに習い悠希の家の前まで来た。
「じゃ、またね」
「待って！」
家に向かいかけた私は悠希に呼び止められて足を止めた。悠希は今にも泣きそうな顔で私を見ていた。
「今さ、私の両親いないの。もう少し、もう少しで良いから一緒にいて」
学校であんなものを見て、一人でいるのは酷過ぎる。せめて落ち着くまでは一緒にいてあげたい。
悠希の家に入ると、リビングに通された。何度か遊びに来たことのある悠希の家は夏休み前に遊びに来たときと同じくきちんと片付いていた。
「ごめんね。無理に上がってもらって」
手にオレンジジュースを持った悠希が台所から出てきて私の隣へ座った。

「大丈夫だよ。家に帰っても職代は？勉強は？って怒られるだけだもん」
「それは麻理が悪いよね」
「・・・ソウデスネ」
そういって笑い合うと、さっきあった怖かったことが全部夢だったように思える。
「ね、麻理テレビ見ようよ」
私の返事を待たずに、そばにあったリモコンでテレビをつけた。
つけたチャンネルがやっていたのはニュース番組だった。何気なくそのニュースを見た。
『8月22日午後一時三十分ごろ、山道を走っていたバスがガけ下に転落し乗っていた乗客すべてが死亡しました。バスに乗っていたのは沖波中学校女子バスケットボール部で合宿の帰り道で事故にあったものと思われます』
それから先もテレビに映っているアナウンサーはべらべらと何かをしゃべっているようだったが、私の耳には何も入ってこなかった。
それは悠希も同じだったらしい。商店の定まらないような目で画面を見ていた。
しばらくして、悠希は小さく聞いてきた。
「これって、バスケ部の皆は最初からいなかったってこと？」
私は何も答えることが出来なかった。ただ、悠希が学校で言った怪談をすると集まってくるという言葉が頭の中を回っていた。
私たちが軽い気持ちで怪談なんてやってしまったから集まってきちゃったんだ。
その考えは私の心に重くのしかかった。
「悠希、ごめん。わたし帰るね」
気分が悪くなった私は、家に帰って寝てしまいたかった。
私の気持ちを知ってか知らずか、大丈夫？と聞いただけで引きとめようとはしなかった。
悠希の家の玄関から顔を出すと、雨に強く顔を打たれた。シトシト

とした雨はいつの間にかバケツをひっくり返したような激しさになっていた。
「傘かそうか？」
心配そうに悠希が聞いてきた。
「大丈夫。走って帰るよ」
私は笑って悠希の申し出を断った。
本当は傘があるとありいがたいが、この雨で傘を折ってしまったら悠希に悪いと思ったからだ。
悠希は最後に静かに気をつけてと言った。
その声に大きく頷きながら、私は暗い雨の中を何かから逃げるようにして家へと走った。

＋＋＋

「ただいま」
帰ったら少しは元気にただいまを言おうと思っていたが、今の私にはいつものような元気を出すことは不可能に近かった。
「麻理ッ」
すぐにお母さんの声が聞こえた。怒られることはわかっているが、今は怒られてでも良いから少しでもさっきのことを忘れたいと思った。
しかし、お母さんの様子はいつもと違っていた。青ざめた顔で玄関に突っ立った私の手を握ってまくし立てるように聞いてきた。
「ニュース！ニュース見た！？」
バスケット部のニュースのことだろうか。娘の通っている学校でいきなり多くの死者が出たら取り乱すのも当然かもしれない。
「バスケット部のニュースならもう・・」
「そのニュースじゃない！とにかく来てっ」
お母さんは前進びっしょりの私の手を引いてリビングへと向かった。濡れた体から流れ落ちる水がポタッポタッとフローリングの床をぬ

らした。
リビングではニュースが流れていた。悠希の家で見たアナウンサーとは別の人だった。
『――であり、沈没した船には４３名のハワイ観光客乗っていました。現時点の情報では生存者１５名、行方不明者２３名、死者５名となっています。死亡した方で身元が分かるのは以下の４名です』
テレビ画面の下のほうに白い文字で４人の名前が表示された。
私はその名前を見たとき悲しみや驚き、そのほかたくさんの感情が入り混じり、何も考えることが出来なくなってしまった。何かに浸食されるように頭の中が真っ白になっていき、頭の中が完全に城絵と塗り替えられたとき、私の意識はそこで途切れた。
テレビに表示された４人の名前の中に、一人だけ知っている名前があった。
‘岡田悠希’
テレビには確かにそう映し出されていたのだ。

＋＋＋

あれからどのくらい寝てしまっていたのか。おきたら次の日のお昼で、お母さんが買い物へ行こうとしているところだった。
お母さんは私を見ると、一瞬目を泳がせた後私の目を見て優しく言った。
「麻理、悠希ちゃんは大好きな麻理にお別れを言いに来たのよ」
その言葉を聴いたとき、私の頬を涙が伝った。
自分でも驚くほど突然のことで、いくら止めようとしてもなかなか止まらなかった。そんな姿をお母さんに見られるのが嫌でお母さんに背中を向けるとすぐに部屋に戻り部屋の鍵をかけると、ベッドに横になった。小さく玄関が開閉するときの鈍い金属音が聞こえた。数秒の間をおいて車のエンジン音も耳に入ってきた。お母さんが買い物に行ったのだと上手く回らない頭で理解した。

昨日の悪い夢のような出来事はすべて変えようのない現実。
それは分かっていることなのに、私は現実だと思うことが出来なかった。思いたくなんてなかった。
いろいろな想いが頭の中を駆け巡っていたそのとき、どこからかポタッポタッと水が落ちるような音が聞こえてきた。
雨でも降ったのかと窓にかかったカーテンを少しだけ開けて空を見た。そこには昨夜の激しい雨がうそのように晴れ渡った青空が広がっていた。
よく耳を済ませてその水音を聞くと、家の中からしているものだと気づいた。
私はこのポタッポタッという音に聞き覚えがあった。昨日の夜、私の群れたからだから落ちた水がフローリングの床をたたく音と同じ音だった。
しかし、お母さんが買い物へ出かけた今、この家には私以外に誰もいないはずだった。
ポタッポタッという音は次第に大きくなってきていた。なんとなく私の部屋へ向かっているのだと思った。
頭でそう考えても、怖いという感情はあまりなかった。これが夢なのか現実なのかはっきりしていないせいだろう。
フローリングの床をたたくその水音は案の定私の部屋の前で止まった。そしてすぐにガチャガチャとドアノブをまわすような音が部屋の中に鈍く響いた。数回ノブをまわす音がしたが、鍵がかかっているため諦めたのか今度はドアをバンバンと叩きだした。
耳障りなほど大きいその音の中で、私は声を聞いた。
「麻理ぃ、私だよぉ。勉強をね手伝いに来たんだぁ。ここ開けてよぉ」
私の大好きな友達の声。もう二度と聞けないと思っていた友達の声を聞いて私の手は吸いつけられるように部屋の鍵のほうへと伸びていた。
バンバンとドアを叩く音の中で、私が鍵を開けたときの金属のカチ

ャリという音は異質な音色を持って室内に響いた。
そして――――――――――。

『――ただいま入った臨時ニュースです。沖波町２丁目に住んでいる小倉麻理さんが自室で溺死しているところを買い物から帰ってきた小倉亜紀さんに発見されました。小倉さんの家の中は麻理さんの部屋まで海水で濡れた後が一直線に続いており、麻理さんの肺や胃に海水を含んでいたことから警察は他殺の線で捜査を開始しています。また麻理さん遺体は数本の毛髪を握り締めており、ＤＮＡ鑑定をしたところ、昨夜死亡が発表された岡田悠希さんのものと判明しました。これで臨時ニュースを終わります。――』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3391n/

夏休み

2011年10月7日08時27分発行